

月刊がん

がん医療の最新情報
患者と家族、医療者のための交流誌

6

2003年6月号
vol.43

MEDICAL PRESS for CANCER

もっと いい日



特集

がんの漢方治療

症状緩和、QOL向上から再発予防まで

- がん治療は「統合医療」で ●漢方薬で抗がん剤の副作用を軽減 ●消化器がんの手術と漢方療法
- 漢方薬による婦人科がんの再発予防 ●精神症状をやわらげる漢方療法

逸見晴恵のちょっとおじゃまします

「人生は、偶然の積み重ね」 作詞・作曲家 小椋 佳さん

消化器がんの手術と漢方療法

術前の免疫力の向上と術後のQOLの改善に効果

取材協力 ● 渡邊賢治 慶應義塾大学医学部東洋医学講座助教授
今津嘉宏 東京都済生会中央病院外科副院長

胃、大腸などの消化器系のがんに対する治療は、手術、放射線治療、化学療法の3本柱が中心となる。それぞれ優れた治療法だが、患者の体に大きな負担を与えることもある。このような負担を軽減するため、手術と組み合わせて漢方薬を用いる病院も少なくない。術前の体力増強、免疫力の向上や術後のQOLの改善に大きな効果を現しているという。消化器系のがんの手術前後に漢方治療がどのように生かされているかを、慶應義塾大学医学部東洋医学講座助教授の渡邊賢治医師と東京都済生会中央病院外科副院長の今津嘉宏医師に伺った。

取材・文 ● 柄川昭彦
撮影 ● 山下武

治療を全うするために補助的に漢方医学の力を借りる

手術と漢方薬という組み合わせは、水と油のようなものだと思っていた。ところが、どうやらそうではないらしい。例えば、慶應義塾大学病院では、大腸がんの手術後に大建中湯という漢方薬を投与することがクリティカルパス（治療計画書）のなかに組み込まれていて、すべての患者に投与されているのだという。クリティカルパスに漢



渡邊賢治医師

リスクの人たちに対する予防に漢方薬を生

方薬の使用が組み込まれているのは慶應義塾大学病院だけのようだが、手術と組み合わせる漢方薬を用いている病院は、決して少なくないらしい。漢方治療は、現代の医療において、新たな役割を果たすようになっているといえるだろう。

慶應義塾大学医学部東洋医学講座の渡邊賢治医師によれば、がん治療の補助療法として、漢方薬には大きな期待がかけられているという。

「がんに対する漢方医学という点、ハイ

かせるケースがありますし、治療においても多くの場面で使われています。ただ、漢方薬だけでがんを治療できるかという点、それは不可能。現代医学的な治療の補助療法として、漢方医学は大いに期待されているし、実績も上げています」

がんの現代医学的な治療は、手術、放射線治療、化学療法が3本柱になっている。それぞれ優れた治療法だが、患者の体にダメージを与えてしまうというデメリットも併せ持っている。手術が侵襲の大きな治療法であるのももちろん、放射線治療や化学療法にも大きな副作用があることは、よく知られている通りだ。

「がんの治療では、がんを攻撃すると同時に、どうしても患者さんの体にも攻撃を加えてしまうわけです。そのため、計画通りに治療を進められなくなるケースが少なくありません。漢方治療を行って、こうしたマイナス面を軽減すると、計画通りに治療を全うできる可能性が高まります。それによって、治療効果も向上するだろうと



今津嘉宏医師

考えられています」

手術によって生じる体力低下を防ぐことや、放射線治療や化学療法の副作用を軽減することは、治療を続けるための有力な助けになるに違いない。さらに、患者のQOL（生活の質）を向上させることにもつながる。現代医学的治療と併用して行われる漢方治療には、治療成績とQOLの双方を向上させる効果があるのだ。

ここでは、消化器がんの手術の前後に、漢方治療がどのように生かされているのかを紹介していこう。

手術前に漢方薬を投与し免疫活性の向上を狙う

まず、手術を前にした患者さんに対して漢方治療が行われることがある。漢方薬で患者さんの体を良い状態にしてから、手術を受けるようにするわけだ。

「がんを持つている患者さんは、それだけで体力が弱っているし、免疫も抑制されています。それに加えて、手術前の禁食で一段と体力が低下します。そこに手術による侵襲が加わるわけですね。これでは大変なので、手術前に漢方薬を用いることで、少しでも手術によるダメージを軽減させようというわけです」

一般的に使われるのは、十全大補湯という漢方薬。弱った体力を回復させるために使われる薬である。投与期間は、食事が可能な手術前の1週間だという。

渡邊医師によれば、手術前に漢方薬を投

与することで免疫活性が低下しにくくなることは、すでに明らかになっているという。手術を受けると免疫力のひとつの指標であるNK活性が低下するが、漢方治療を併用することで下がらなくなるのだ。NK活性はいわゆる原始免疫のことだ。「笑うと免疫力が向上する」などと言われることがありますが、この免疫が原始免疫だ。

「これまでも手術前の漢方薬投与は行われていて、効果があるという印象は得ています。ただ、具体的にこのような効果があったというデータがまだないのです。手術を行う外科の医師たちに納得してもらうには、しっかりしたエビデンスが必要なので、今後、そうしたデータを得るための研究が行われる予定になっています」

手術後の漢方薬投与で腸閉塞や感染症を予防

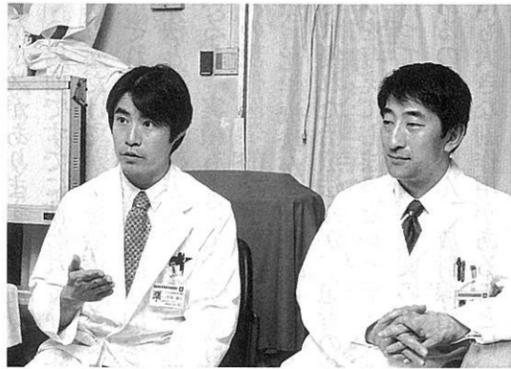
手術後の漢方治療は、すでにかなり行われているようだ。前述したように、特に大腸がんの手術後には、慶應義塾大学病院では必ず大建中湯が投与されている。

「大腸がんの手術後に大建中湯を投与する治療法は、すでに5年ほど前から行われていて、2年前からクリティカルパスに入っています。大腸がんの手術を受けた患者

さんは、腸の運動が低下しているので、食事を開始すると腸閉塞を起こす危険性があります。それを防ぐのに、手術後の大建中湯は効果的ですね」

また、大腸がんの手術に限らず、術後の感染症を予防する目的でも漢方治療が行われることがある。渡邊医師によれば、感染が起りやすいのは手術直後ではなく、手術後数日からだという。手術直後はまだ戦闘状態が続いていて、免疫が賦活されているので感染が起きにくい、ひと段落ついたところに感染を起してしまうケースが多いのだ。その危険な時期を乗り切るために、漢方薬が使われている。

「使われるのは十全大補湯などの漢方薬で、感染症予防の目的で用いる場合の投与期間は30日間となっています。ただ、手術後の免疫を高めておくことは、感染症の予



には食べ物を入れて腸管から栄養を吸収させるために入れるチューブなのだが、漢方薬の投与にも使っているのだ。

「手術前は絶食するのに加えて抗生物質も使うので、腸の中の細菌叢が破壊されています。さらに腸の動きも悪くなっていることが多いので、漢方薬を使うのが効果的なのです。腸の動きが悪くて便秘のひどい人には大建中湯、腸の動きに問題のない人なら十全大補湯が使われています」

実際には腸の動きが悪いことが多いため、外科医の間では大建中湯が最もよく使われている、と今津医師は言う。チューブを使って胃や腸に漢方薬を流し込むというのは、普通の人たちが抱えている漢方薬のイメージから大きくかけ離れているかもしれない。しかし、これらの漢方薬は、現代の先端医療のなかで、重要な役割を果たすようになってきているのだ。

消化器がんの手術を受けた患者さんに対し、漢方療法を行って効果のあった症例を、今津医師に紹介してもらった。

●症例1 (60代・男性)

大腸がんの手術を受けた後、手術の傷が気になり、お腹に力を入れるのが怖くてトイレに行く回数が減り、それが原因で便秘気味になった。下剤をもらって退院したが、下剤を飲むと夜中から腹痛におそわれ、水のような便が出るひどい下痢に苦しめられる。夜中の下痢のためにすっかり疲れてしまい、体の力が抜けてしまうようだと訴えていた。

防だけでなく、がんの再発予防にも関係するのではないかと考えています。そうした目的であれば、ずっと服用を続けたほうがいいでしょうね」

手術でがん組織を切除しても、わずかながん細胞が体のどこかに散らばってれば、そこから再発が起きてしまう。しかし、免疫が活性化していれば、がんの増殖を抑え込める可能性があるというわけだ。手術後の漢方治療にこうした効果があるかどうか、現在はまだ研究が進められている段階だという。

「薬を長く飲み続けることに不安を抱く人もいると思いますが、十全大補湯のように体力の低下した人に向く漢方薬は食品に近いものですから、安心して飲み続けることができます」

漢方治療では、患者の体の状態に合わせて薬を処方するのが基本になっている。十全大補湯は「気血両虚に用いる」とされる薬だという。漢方医学では「気、血、水」で体の状態を表すのだが、気虚（エネルギー不足の状態）と血虚（全身の栄養不足）が見られる場合に用いられる薬というわけだ。もともと体力のある人でも、がんになり、手術を受けた後では、「気血両虚」の状態になっていることが多いという。

漢方でも、体力が充実した人に用いられる薬は攻撃性が強い。風邪の薬としてよく知られている葛根湯は、その代表的なものだそう。それに対し、十全大補湯のように体力の低下した人に向く漢方薬は、攻撃

大建中湯をお湯で服用するように指示したところ、服用後数時間でお腹が落ちつき、お腹のなかからぽかぽかと温かくなってきたと言う。その後は、下剤を使うのを極力避け、大建中湯を毎食後に服用。薬に排便できるようになった。

●症例2 (70代・男性)

胃がんのため胃の上部を切除する手術を受けた後、吻合部の狭窄のために食物がうまく通過せず、何度か内視鏡的拡張術を受けた。それによって食べ物の通りはよくなったが、いつも胃が張っていて食欲がわかず、体重も手術前に比べて5kg以上減ってしまった。体力が低下し、家ではほとんど寝ている状態。十全大補湯の服用を開始したからは、食欲が出てきて、体重も戻り始めた。体力も回復し、少しずつ外出もできるようになってきたと言う。

これらの症例が、ほんの一部ではないのはもちろんのこと。がんの手術を受け、その後の体調不良に悩まされていた多くの患者が、漢方療法によってQOLの改善に成功しているのだ。

がんの患者さんに生きる力を回復させる

消化器がんの患者さんには、食欲が低下して食事が摂れなくなるといふ症状が現れることがある。手術後にもあるし、がんが進行してしまった場合にも、こうした症状が問題となることがある。渡邊医師によれば、食べられなくなること、体力も気力

性が低く、マイルドに作用するのが特徴。葛根湯は長期間飲み続けていい薬ではないが、十全大補湯は長く飲み続けることで本当の効果が現れてくる薬なのだ。

手術後の漢方薬は胃や腸に直接チューブで入れることもある

手術後の患者の状態は、どのような手術を受けたかによって大きく異なっている。消化器がんに限っても、食道がんと胃がんと大腸がんでは違うし、同じ胃がんでも、胃を全部摘出した場合と、部分的に切除した場合では異なっている。

東京都済生会中央病院外科副院長の今津嘉宏医師（慶應義塾大学医学部東洋医学講座共同研究員）によれば、食道がんの手術は胃がんや大腸がんの手術の3倍以上の負担があり、胃の上部切除のように横隔膜の近くの手術は、横隔膜から遠い部分の手術に比べて負担が大きくなるという。

「手術後、食事ができるようにするまでの期間も、手術の種類によってかなり差があります。胃の下部切除や大腸がんの手術では手術後3〜4日目から食事が始まりませんが、胃の全摘手術では1週間から10日くらい、食道がんの手術だと10日目前後になります」

漢方薬を経口投与すると、手術後これだけの期間、漢方薬の投与を待たなければならぬ。そこで、胃壁や腸壁に穴を開けてチューブを挿入し、漢方薬を投与する方法も行われているのだという。基本的

も落ちてしまうことが多いそう。 「食事ができなくなると、生きる意欲も失われてしまいますからね。しかし、そんな患者さんでも、漢方薬で食欲が回復してくると、生きることに意欲的になってくるし、それに伴ってさまざまな症状も軽くなってきます。緩和医療の分野でも、漢方治療は大切な治療手段のひとつになっています」 こうした治療に用いられているのは、人参湯、四君子湯、茯苓飲、真武湯などの漢方薬。いずれも体力の低下した人に適した薬で、患者さんの症状に合わせて使い分けられるのだという。

「食べると元気が出てくるのは、栄養が取れるからだけではありません。食べると腸内細菌が活性化し、腸管免疫の活性化につながります。そして、それが全身の免疫を活性化させてくれるわけです。栄養だけでなく点滴で入れることができますが、食べ物を食べることは、それだけではない効果があるのです」

現代の医療のなかで、漢方治療が貢献できる局面はまだまだあるのかもしれない。 どういうところに役立つのかは、今後の研究が明らかになってくれるだろう。慶應義塾大学医学部では、再来年から漢方医学が必修科目になる。21世紀の医療を担っていくためには、最低限の漢方医学を身に付けておく必要があるということだろう。今、時代が漢方治療を必要としているのだ。